日比谷公園開園時における二・三の施設の石材加工・利用技術

Technology of Working and Utilization of Stone for Some Facilities in the Beginning Hibiya Park, Tokyo

丹羽桂太郎* 小林 章**

Keitaroh NIWA Akira KOBAYASHI

Abstract : This study examined into the technology of working and utilization of stone for some facilities, (1) entrance gateposts, (2) roadway curbstones and (3) pond bank stones in the beginning Hibiya Park (1903, Tokyo) by field survey and literature research. (1) The gateposts of Hibiya Park's 6 entrances were similar to gateposts of western-style building's exterior, and those were made by Japanese stonemasonry. The stones of gateposts were reused andesite or granite stones of the walls with outer castle gates of Edo castle. (2) The Hibiya park's western-style roadway set granite curbstones and concrete gutter. And the pedestrian way side in the park was set cobblestone curbstones and gutter. The cobblestones were local gardening material in Edo. (3) The bank of Shinji-ike-pond (Shinji means Chinese character 'Kokoro'): Japanese-style pond laid cobblestones randomly like the ponds of gardens in Edo. The bank of Kumogata-ike-pond (Kumogata means 'French curve'): western-style pond laid single sized cobblestones for artificial shape. Then, technology of working and utilization of stone for some facilities in the beginning Hibiya park were based on western style architecture and civil engineering, and exploited Japanese technique —skills and materials of Edo.

Keywords: Hibiya Park, technology of working of stone, technology of utilization of stone, gatepost, curbstone, cobblestone

キーワード: 日比谷公園, 石材加工技術, 石材利用技術, 門柱, 縁石, 玉石

1. はじめに

明治 36 (1903) 年に開園した日比谷公園は、東京における近代洋風公園の先駆とされる。これ以前に開園した洋風公園には横浜の山手公園 (明治 4 年開園) や彼我公園 (明治 9 年開園), 神戸の東遊園 (明治 8 年開園) などがあるが、これらは外国人居留民のためのものであった。日比谷公園は一般市民の利用を想定して首都東京に新設され、その後の都市公園に影響を与えたという点において、日本の公園史上重要な位置付けとなっている。日比谷公園の誕生の経緯については前島康彦「東京公園文庫 1 日比谷公園」(1980 年)¹⁾ や白幡洋三郎「近代都市公園史の研究—欧化の系譜—」(1995 年)²⁾ などに詳しく、既往研究は少なくないと言える。しかし、その建設技術的側面にスポットを当てた研究は未だに行われていない。

そこで、本研究では日比谷公園開園時に設けられた石造施設に着目して、その建設に表れた石材加工・利用技術の一端について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

本研究では日比谷公園の主要な石造施設、(1) 入口の門柱、(2) 車道・歩道の縁石および側溝、(3) 心字池・雲形池の護岸の玉石、の石材加工・利用技術を研究対象とし、それぞれについて文献調査と現地での実測調査を行った。本論文で取り上げた日比谷公園の施設の位置を図-1 に示す。

(1) は形状寸法等の実測を行った。「東京公園文庫 1 日比谷公園」(1980 年)¹⁾ には開園以降に門柱が損壊したとの記述はないので、現存する門柱は関東大震災等の被害は受けていないものとみられる。また、明治期の写真より当時の建築外構等の門柱とのデザインの比較や、日比谷公園の門柱に採用された石材加工技術の考察などを行った。

(2) については、開園時の平面図³⁾ と現在の平面図¹⁾ を比較したところ、車道の変更は原則として行われていないので、現存

している縁石・側溝も開園時のものであるとみてよい。これら車道の縁石の長さや幅の実測、および植込地側を掘削し縁石の断面の実測を行った。また、明治期の道路技術関連の出版物に掲載された縁石・側溝の断面図と、日比谷公園のものとを比較した。

(3) については、心字池・雲形池護岸に使用されている玉石のうち土に埋没していたり水中にあるものを除き、計測可能なものの実測を行った。心字池の護岸は開園後に大規模な改修が行われた形跡は見られない。一方、雲形池は戦後の地下鉄工事¹⁾ 等の際に影響を受けたと見られるが、開園時と同じ形態の護岸も部分的に残されている。どちらも現存する玉石は開園時のものと考えてよいだろう。また、旧浜離宮恩賜庭園・旧芝離宮恩賜庭園等の池護岸の現地調査と、明治期の日比谷公園心字池・雲形池や浅草公園・深川公園・鹿鳴館等の池の写真から、日比谷公園の心字池・雲形池護岸の特徴についての考察を行った。

(1)~(3) の実測は 2004 年 11 月から 12 月にかけて行った。

図-1 日比谷公園開園時の平面図
(「東京の公園 80 年」³⁾ に掲載されたものに加筆)

*東京農業大学大学院農学研究科 **東京農業大学地域環境科学部造園科学科

3. 結果および考察

(1) 門柱における石材加工・利用技術

現在、日比谷公園には9ヶ所に門が設けられているが、公園開園時に存在したのは日比谷門(写真-1)・幸門(写真-2)・西幸門(写真-3)・霞門(写真-4)・桜門(写真-5)・有楽門(写真-6)の6ヶ所であった¹⁾。各門には当時の門柱が現存している。

(i) 門柱の配置と形状

表-1に各門柱の形状寸法、図-2に門柱同士の間隔および配置形態を示す。日比谷門・霞門・桜門は門の左右に大きな門柱、その外側に小さな門柱が建てられている。幸門・西幸門は、現存するのは左右の大きな門柱のみだが、西幸門にはその外側に小さな門柱の基礎と見られる部分が残されている。また、開園時には存在しなかった中幸門の左右には花崗岩製の小さな門柱が建てられているが、これはもともと幸門の外側にあったものを移動したと思われる。このように日比谷公園の門柱は、基本的には門の左右に各2本ずつ建てられていた。しかし、有楽門は左右に小さな門柱が1本ずつ建てられた。これらの門柱のデザインはいずれも洋風であり、上には灯具が置かれている。このような形は外務省(写真-7)⁴⁾・逓信省・内務省・東京裁判所・東京府庁など⁵⁾洋風建築の外構に少なからず見られることから、門柱は西洋の建築的技術であると言える。また、明治末の上野動物園正門(写真-8)⁶⁾にも設けられていたことから、建築外構以外においても珍しいものではなかった。ただし、門に扉を設けなかったのは、日比谷公園のユニークな点であった。明治34(1901)年6月12日付「讀賣新聞」⁷⁾に掲載された日比谷公園の設計案の概要による

と、各門には扉を設け、そのうち日比谷門は出入口を2ヶ所設置して往復を区別することになっている。しかし、この設計案は最終的に予算を削減されて東京市会で可決されており、その過程で若干の設計変更が行われたと考えられる。また、日比谷公園の設計者である本多静六は、各門に扉を設けなければ夜間に花や木を盗まれるのではないかと東京市会で問われた際に、「公園の花卉を盗まれぬ位に、国民の公德がすすまねば日本は亡国だ。公園は一面、その公德心を養う教育機関になるのだ。」と述べている¹⁾。各門に扉を設けなかったのは、このような本多静六の意図があった。

(ii) 門柱の石材と加工・利用技術

各門柱は形状がほぼ統一されているものの、寸法が微妙に異なる一品生産であり、安山岩製か花崗岩製である。各門に建てられた門柱のうちの1本あるいは2本にはその石材の由来や施工年を示す銘文が漢文で彫られており、それをまとめたのが表-2である。日比谷公園の建設工事が本格的に始まったのは明治35(1902)年4月である¹⁾ことから、銘文に刻まれた『明治三十五年』は日比谷公園建設時に製作されたことを示している。また、『赤坂門』・『四谷門』・『幸橋門』・『数寄屋橋門』・『鍛冶橋門』・『日比谷門』とは江戸城外郭の旧見附の名称であり、その枡形石垣の礎石に使われていた石材を再利用したことが読み取れる。図-3は日比谷公園門柱に石材が再利用された枡形の位置をプロットしたものであるが、主に日比谷公園周辺の枡形から石材が集められていることがわかる。枡形の石垣を構成していた石には大きいものが用いられ⁸⁾、なかでも四方の隅角部の基礎部分には、根石と呼ばれるひととき大きな石が設置された⁹⁾。日比谷

写真-1 日比谷公園・日比谷門

写真-2 日比谷公園・幸門

写真-3 日比谷公園・西幸門

写真-4 日比谷公園・霞門

写真-5 日比谷公園・桜門

写真-6 日比谷公園・有楽門

写真-7 外務省庁舎

写真-8 明治末の上野動物園正門
(「彩色アルバム明治の日本」⁴⁾) (「こんなに面白い上野公園」⁶⁾)

注)写真1～6は2004年撮影

表-1 日比谷公園・各門の門柱の現存本数・形状寸法・石質

門の名称	現存本数	門柱①(小-左)		門柱②(大-左)		門柱③(大-右)		門柱④(小-右)		石質
		高さ(m)	幅(m)	高さ(m)	幅(m)	高さ(m)	幅(m)	高さ(m)	幅(m)	
日比谷門	3本	基礎のみ現存		4.4	0.86	4.4	0.86	—		安山岩
幸門	2本	—		3.7	0.89	3.7	0.89	—		花崗岩
中幸門*	2本	2.7	0.55	—		—		2.6	0.56	花崗岩
西幸門	2本	基礎のみ現存		3.9	0.90	3.9	0.89	基礎のみ現存		花崗岩
霞門	4本	2.6	0.56	4.0	0.88	4.0	0.87	2.6	0.55	安山岩
桜門	4本	2.7	0.56	3.9	0.87	3.9	0.85	2.6	0.55	安山岩
有楽門	2本	2.5	0.55	—		—		2.5	0.56	安山岩

注1) *開園時には門が存在しなかった。

注2) 門柱①～④の番号は図-2と対応している。

日比谷門

幸門

西幸門

霞門

桜門

有楽門

注) 2004年実測

図-2 日比谷公園・各門の門柱の配置 (単位: m)

公園の門柱に使用されている石材はその大きさからして、かつて根石に用いられていたものであることを表している。

門柱の銘文には漢文が使用されており、その書体は江戸時代に製作された安山岩製の燈籠に彫られたものと酷似している(写真-9, 写真-10)。江戸では石垣や燈籠など様々な石造物に、伊豆半島や現在の神奈川県真鶴町周辺に産する安山岩が使用されていた。明治以降は茨城県産の花崗岩である稲田石が、東京において市電の線路敷や建築物等に多量に使用されるようになった¹⁰⁾。しかし、その採掘方法は伊豆や真鶴の安山岩と同様、まだ基本的に人力にたよるものだった¹¹⁾。また、稲田石の採掘・加工には真鶴の安山岩の石工職人も参画し、技術移転がなされていた¹²⁾ことから、東京において花崗岩の加工にも江戸時代に起源をもつ安山岩の石工職人の技能が継承されていたと言える。すなわち、日比谷公園の安山岩製および花崗岩製門柱の整形的な石材加工には、江戸の技能が活かされていたとみてよい。門柱の製作において、デザインには西洋の建築的技術を取り入れつつ、その加工には日本の伝統的な技能が活用された。

日比谷公園の門柱のうち幸門と西幸門のものは花崗岩製である。江戸城の石垣の材料は基本的に安山岩であり、花崗岩は石垣の角や枅形など人目を引く場所に部分的に使用された。また、明暦3(1657)年の大火により江戸城の天守台石垣が被害を受けて修築した際に、石垣の表面部分の石材は殆どが花崗岩に取り替えられた¹³⁾。このように、江戸において花崗岩は特別な石材として扱われていたことがうかがえる。前出の設計案¹⁷⁾には『東南隅より入

表-2 日比谷公園門柱の銘文

門の名称	銘文
日比谷門	以赤坂門及四谷門舊礎建設之
幸門	(銘文が現存しない)
中幸門	以幸橋門舊礎建造明治三十五年六月
西幸門	(銘文が現存しない)
霞門	以数寄屋橋門及幸橋門舊礎建造 注1) 明治三十五年六月 注1)
桜門	以鍛冶橋門及数寄屋橋門舊礎建造 注2) 明治三十五年六月 注2)
有楽門	以日比谷門舊礎建造明治三十五年五月

注1) 石材の由来と施工年はそれぞれ別の門柱に彫られている。

注2) 2行に渡って彫られている。

図-3 日比谷公園門柱に石材が再利用された枅形の位置 (『新撰東京全図』¹⁷⁾に加筆)

写真-9 日比谷公園・桜門銘文

写真-10 上野不忍池弁天島に現存する寛永寺型燈籠銘文 (寛延4年・1751年)

るを幸門と称し赤斑大理石柱を立て』、『南西貴族院議長官舎傍より入るを西幸門と称し寒水石柱とし』とあることから、大理石や寒水石といった洋風建築向けの高級石材の代用として、安山岩よりも高級感のある花崗岩が選ばれたと考えられる。一方で、この設計案では日比谷門の材料に竹葉石を用いることとされており、和風の石材も検討されていたことがわかる。

(iii) 門柱における枡形の石材利用

江戸城外郭の見附は、明治3（1870）年から明治6（1873）年にかけて撤去された¹⁴⁾。しかしこのとき枡形は取り壊されず、市区改正設計による新たな道路建設や道路拡張の際に撤去された。「地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書3 赤坂御門・喰違土橋」¹⁴⁾によると、赤坂門の枡形は、明治30（1897）年6月24日の東京市区改正委員会で決定された『本郷区本郷三丁目及麹町区三宅坂ヨリ赤坂門外に至ルノ道路』の建設によってその一部が撤去されたと推測している。また、鍛冶橋門の枡形は明治32（1899）年7月6日の東京市区改正委員会で撤去が決定された¹⁵⁾。理由は『道路の取広めを為し危険を除き交通上の利便を増進』¹⁵⁾するためであった。更に、幸橋門・数寄屋橋門の枡形は明治33（1900）年10月4日の同委員会で撤去が決定された¹⁶⁾。枡形は、東京の近代化によって犠牲となった江戸の遺物であると捉えることができる。

門柱の材料となった石材は、複数の枡形から集められている。しかも、いずれも石垣の中で特に重要な部分である礎石の大材を用いている。また、公園内の心字池の東側には日比谷見附周辺の石垣の一部がそのまま残されている。言うまでもなく石垣は江戸の街を形作っていた施設であり、その建造には江戸時代の高度な土木技術が注ぎ込まれている。

これらのことから、門柱の材料に旧見附の枡形に使われていた石材を用いたのは単なるリサイクルではなかったと考えられる。

(2) 縁石および側溝における石材の加工・利用技術

日比谷公園内の園路は車道と歩道とに分けられ、車道は『六間幅 七百二十間』、『五間幅（仮） 二百五間』、『音楽堂周囲 六十間』とされた¹⁾。写真-11¹⁸⁾は開園式当日のもので、テントのある場所は音楽堂（現在の小音楽堂の前身）の建設予定地である。その手前を左右に通っている『音楽堂周囲 六十間』の車道へとつながる道には両側に側溝が写っている。2列の縁石が設けられ、その間にコンクリート製の溝が造られている。このような形の側溝は暗渠への接続を前提とした構造である。開園翌日の明治36（1903）年6月2日付「東京日日新聞」の記事に『下水道は道路の

両側に設け之を暗渠に疎通す』とある¹⁾ことから、公園内の他の車道にも写真-11に写っているものと同じ側溝が設けられたと考えてよい。音楽堂周辺はその後改修が行われこの写真の側溝は現存しないが、『六間幅』の車道として設計された幹線園路の両側に現存する側溝はこれと同タイプであり、縁石には花崗岩の切石の量産品を用いている（写真-12）。縁石の幅は図-4に示すとおり24cmで均一であるが、長さは均一ではなく、不揃いな乱尺ものが使用された（図-5）。日比谷公園の幹線園路は全て幾何学的な曲線であり、曲率も異なり、それに対応するために様々な長さの縁石を組み合わせる方法を取ったとみられる。

日比谷公園建設と同時期に出版された「道路学一斑」（1902年）¹⁹⁾には『邊石は人道の外側に樹立して一方には其の被覆を支持し他の一方には排水渠の一面をなすものなり』¹⁹⁾とあり、側溝とともに花崗岩製の縁石が描かれた断面図が掲載されている（図-6）。そこでは、縁石の寸法はインチで表記されている。一方、日比谷公園の縁石の寸法は18cm×24cmと3cmの倍数であることから、日本の寸法単位である尺貫法によるものと見られる（図-4）。また、「土木工学 市街道路編」（1897年）²⁰⁾にも車道と歩道の『接合法』²⁰⁾として、同様の断面図が掲載されており（図-7）、側溝および縁石の基礎部分はコンクリートで造ることとなっている。日比谷公園の幹線園路の縁石も基礎部分はコンクリートで築造された（図-4）。

明治の日本において車道と歩道を区別した道路は、横浜や神戸などの外国人居留地に多く造られていた。また、東京では明治10（1877）年完成の銀座通りが嚆矢であり、以後同様の型の道路が次々に建造された²¹⁾。外国人居留地（写真-13）⁴⁾や「一丁ロンドン」と呼ばれた丸の内道路⁵⁾では、車道と歩道の境界に縁石が設けられた。まだコンクリートブロックの縁石は普及しておらず、工業化した石材産業の量産品の縁石が用いられていた。

明治より以前の日本の側溝は石積みあるいは素掘りの深い開渠であった。浅い側溝と切石の縁石を両側に設置するのは洋式街路の型であり、この点において日比谷公園には西洋の道路様式、すなわち土木技術が導入されたと言える。そして、花崗岩の縁石お

写真-11 日比谷公園音楽堂建設予定地付近の園路に設けられた縁石・側溝（開園式当日の写真、(財)東京都公園協会所蔵¹⁸⁾）

注1) 断面掘削調査は植込地側のみで行った。
注2) ……で示した部分は推定で描いたものである。

図-4 日比谷公園幹線園路花崗岩縁石・側溝断面図

写真-12 日比谷公園幹線園路に現存する縁石・側溝

注) 縁石の幅は24cmで均一である。障害物等により長さを計測できなかったものもあり、全数ではないが全体の80%以上は計測した。(n=3559)

図-5 日比谷公園幹線園路の花崗岩縁石の長さ度数分布

よび側溝の石材加工・利用技術は、それに対応するためのものであった。

一方、歩道として設計されたつつじ山の園路には玉石の縁石・側溝が設けられた(写真-14)²²⁾。また、雲形池周辺の園路には、小さな玉石をコンクリートで固定した側溝・縁石が現存している(写真-15)。後述するように玉石は江戸・東京のローカルな素材であり、江戸の大名庭園では普遍的に使用されていた。しかし、その園路には縁石は殆ど設けられていなかった。大名庭園において園路は限られた数の歩行者のためのものであり、園路の縁を強固にする施設を設ける必要がなかったためであろう。日比谷公園では馬車の通行を想定していたため、園路も車道と歩道とに配置を区別され、幅員も変えられた(図-1)。ただし、車道では歩行者も通行していた。車道では縁石に洋式街路と同じ素材である切石が採用されたが、歩道には江戸の庭園でも馴染みのあった和風の素材である玉石を用いて洋式の土木施設が築造されたと言える。

図-6 側溝断面図
(「道路学一斑」¹⁹⁾)

注) E・Fの部分をコンクリートで造ることとされた。
図-7 側溝断面図
(「土木工学 市街道路編」²⁰⁾)

写真-13 神戸外国人居留地の街路の縁石・側溝
(「彩色アルバム明治の日本」⁴⁾)

写真-14 明治時代の日比谷公園・つつじ山の園路の両側の縁石、および画面左手の側溝(「日比谷公園とわたし」²²⁾)

写真-15 日比谷公園雲形池周辺園路に現存する玉石縁石・側溝

(3) 池護岸における玉石の利用技術

江戸の庭園では、旧浜離宮恩賜庭園や旧芝離宮恩賜庭園など汐入の池や小石川後楽園⁵⁾等の護岸に伊豆方面の海岸より産する安山岩を主体とする玉石が使用された。伊豆方面の海岸産の素材を用いて、庭園内に海岸景を表現するためであった。そのため、様々な大きさのものがランダムに並べられた。江戸の庭園において、玉石は水辺のデザインを構成する要素として重要な素材であった。玉石をこのような形で使用するの、江戸の作庭技術の特徴だと言えよう。また、明治以降は浅草公園、深川公園²³⁾や清澄庭園等の池畔に玉石が用いられたことから、東京、特に下町地区において池の護岸に玉石を使用するのは普遍的な手法であった。そして、その並べ方や積み方は江戸の庭園と同様にランダムで自然風なものだった(写真-16)。日比谷公園の心字池は日本風の空間として設計された場所であり¹⁾、護岸の玉石もそれ以前の東京の公園や庭園の池で見られる自然風の積み方で用いられた(写真-17)²³⁾。心字池の護岸は、江戸時代から明治時代へと継承されてきた作庭技術の系譜の上に位置したものと言える。

写真-16 浅草公園の池護岸(「目でみる公園のあゆみ」²³⁾)

写真-17 日比谷公園心字池の護岸(「目でみる公園のあゆみ」²³⁾)

写真-18²⁴⁾は明治末期の日比谷公園の雲形池である。この写真によると、寸法を揃えた玉石を、水平線を強調して整然と人工的な曲線の形状に配置し、空積で階段状に積上げたつくりであったことがわかる。図-8、図-9はそれぞれ雲形池と心字池の護岸の玉石を実測し、それぞれの長径と短径を示したものである。雲形池のほうが心字池よりもサイズのばらつきが小さいことがわかる。これは石材の寸法規格を厳密にして、土木的な品質管理が行われていたことを示している。雲形池は、ドイツのドレスデン園芸学校教授ベルトラム氏の著書にあった標準図をもとに設計された¹⁾幾何学的な曲線の汀線をもつ洋風の池であった。また、鶴の噴水が設けられたことから、洋風の空間を強く意識していたことがわかる(写真-19)²⁴⁾。雲形池は公園開園以来何度か改修工事が行われており、現在その周辺は日本風の空間となっているが、一部に当時の護岸の名残を見ることができる。護岸がこのような形態になったのは、平面図によって表現された洋風の池の形を、施工段階で忠実に実現するためだと考えられる。当時、洋風の庭園として明治16(1883)年開設の鹿鳴館があり、そこにあった円形の池の護岸にも玉石が使用されていたが、その石の積み方は、天端は揃えているものの様々なサイズの玉石をランダムに組み合わせたものであった(写真-20)²⁵⁾。雲形池の護岸に寸法を揃えた玉石を用いたのは斬新で独特な手法であり、今日の公園建設における規格化された工業製品使用の端緒だと捉えることもで

きる。

江戸・東京のローカルな素材である玉石の利用技術は、心字池では江戸の作庭技術を受け継いだもので、雲形池では西洋の土木的な品質管理への対応を意識した新しいものであった。

写真-18 日比谷公園雲形池の護岸（「新撰東京名所百景」²⁴⁾）

写真-19 日比谷公園雲形池・鶴の噴水（「新撰東京名所百景」²⁴⁾）

写真-20 鹿鳴館の庭園の池（「模型でみる江戸・東京の世界」²⁵⁾）

図-8 雲形池護岸玉石の長径・短径 (n=201)

図-9 心字池護岸玉石の長径・短径 (n=251)

4. まとめ

この研究でみた日比谷公園開園時における二・三の石造施設は洋風が志向されたが、それらは西洋の建築技術・土木技術に由来するものであった。西洋の建築技術・土木技術は当時の国内でも普及しつつあるものだった。そして、日比谷公園の施設の石材加工・利用技術は、それに対応するための形状寸法の統一化・均一化に歩み寄るものであった。日比谷公園建設当初にこのような技術が採用されたことは、その後の都市公園における造園建設技術の方向性を決定付ける事柄だったはずである。

一方で、江戸時代から受け継がれてきた石材加工の技能や作庭技術、材料も用いられた。

横浜公園においては、自らの生活スタイルに確固とした信念を持つ居留外国人の「洋魂」による洋風公園建設の要求に対し、伝統的な造園を担う植木屋たちの「和才」による対応がなされた²⁾。同様に、日比谷公園開園時の石造施設は、西洋の建築技術・土木技術という「洋魂」を造園に導入するにあたって、江戸で育まれてきた石に関する技能や技術、材料などの「和才」が活用されたという、『洋魂和才』²⁾の側面も残っていた。

謝辞

本研究を進めるにあたり、日比谷公園管理所および東京都公園協会の各位にはお世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献・資料

- 1) 前島康彦 (1994): 東京公園文庫 1 日比谷公園: 東京都公園協会, 45, 47, 49, 50-51, 53, 54, 96-100
- 2) 白幡洋三郎 (1995): 近代都市公園史の研究-欧化の系譜-: 思文閣出版, 186-231, 259-284
- 3) 東京都公園協会 (1954): 東京の公園 80 年: 東京都公園協会
- 4) 横浜開港資料館編 (1990): 彩色アルバム明治の日本 《横浜写真》の世界: 有隣堂, 5, 6, 8, 73, 146
- 5) 玉井哲雄・石黒敬章 (1992): よみがえる明治の東京-東京十五区写真集-: 角川書店, 23, 24, 35, 65, 68, 70, 73, 75, 192
- 6) 林丈二・丹尾安典 (1994): こんなに面白い上野公園: 新潮社, 81
- 7) 読売新聞 (1901 年 6 月 12 日付 5 面)
- 8) 北原糸子 (1999): 江戸城外堀物語: 筑摩書房, 146-148
- 9) 北垣聰一郎 (1987): 石垣普請: 法政大学出版局, 137-138
- 10) エス (1994): ストーンテリア 37 号: エス, 9-21
- 11) 臨時議員建築局 編纂 (1921): 本邦産建築石材, 281pp
- 12) 真鶴町教育委員会: 真鶴町民俗資料館 (1986 年開館) 資料, 13pp
- 13) 村井益男 (1964): 江戸城 将軍家の生活: 中央公論社, 65
- 14) 帝都高速度交通営団・地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡発掘調査会 (1995): 地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡発掘調査報告書 3 赤坂御門・喰違土橋, 218, 228
- 15) 藤森照信監修 (1987): 東京都市計画資料集成(明治・大正篇) 第 11 巻: 本の友社, 51-52
- 16) 藤森照信監修 (1987): 東京都市計画資料集成(明治・大正篇) 第 12 巻: 本の友社, 119-121
- 17) 金澤良太 (1892): 新撰 東京全図: 大倉書店
(*復刻版は古地図史料出版より 1985 年に発行)
- 18) 日比谷公園開園 100 年記念事業「野外ミュージアム」展示パネル (2003) より
- 19) 君島八郎 (1902): 道路学一斑: 博文館, 205
- 20) 亀井重麿 (1897): 土木工学 市街道路編: 建築書院, 45-49
- 21) 日本工学会 (1929): 明治工業史第 2 巻 土木編: 日本工学会, 35
- 22) 東京都公園協会 (1993): 「日比谷公園とわたし-思い出とみどり展-」パンフレット, 32pp
- 23) 前島康彦 (1957): 目でみる公園のあゆみ: 東京都公園協会
- 24) (1907): 新撰 東京名所百景 (*著者・出版者不詳)
- 25) 東京都江戸東京博物館 (1997): 模型でみる江戸・東京の世界, 75